

なぜ治療は言葉の用いられ方に注意を向けさせるのか？

——ウィトゲンシュタイン『哲学探究』の方法

槇野 沙央理 (千葉大学大学院)

1. はじめに

本稿は、ウィトゲンシュタインの『哲学探究』(以下『探究』と呼ぶ)が、哲学的治療 (cf. PU §255, 593, RPP II §641) という活動を行うものであるという概念に基づき、その活動の内実を明らかにしようとする研究の一環である。今回は特に、治療方法が言葉の用いられ方に注意を向けさせるその理由を検討する。

哲学的治療としての『探究』を明らかにしようとする研究者は、哲学的方法についてのウィトゲンシュタインのコメント¹を軸に、解釈を行っている。哲学的治療とは、特定の見方に囚われた治療対象者に対し、限定的な言語モデルとしての言語ゲームをはじめとした、さまざまな具体例を与える方法によって、最終的に治療対象者が特定の見方から解放されるよう誘うことを目的とした活動である。代表的な研究者には、晩年の G. ベイカー (2004)、C. ダイヤモンド (2004)、E. フィッシャー (2011) らがいる。この研究は、P. ハッカー (1972) をはじめとするいわゆる標準的解釈²の見直しと並行して発展してきたものであり、言語哲学の枠組みには還元できないウィトゲンシュタイン独自の哲学観を探求することを目指している。

哲学的治療の内実を明らかにする研究課題の一つに、治療方法とは何かという課題が存在する。この課題は様々な研究者によって論じられてきたが、彼らに共通の見解は、ウィトゲンシュタインの治療方法が、個々の言葉の用いられ方に着目することによってなされる、というものである。この見解は例えば、G. ベイカー (1991) による「鳥瞰的モデル the Bird's-eye View Model」(p. 28) に対する批判、C. ダイヤモンド (2004) の「卸売りのアプローチ Wholesale Approach」(p. 202) に対する批判と、「小売り [的アプローチ] Retail [Approach]」あるいは「小間切れ作戦 Piccemeal Method」(p. 202) の提示、さらに S. モルホル (2004) の「哲学的理想の理想化 Idealization of the Philosophical Ideal」(p. 82) に対する批判と、「ふだん使いの哲学 Everyday Philosophizing」(p. 82) の提示に、共通するものとして読みとることができる。

¹ 例えば、『探究』の100節前後や、『ビッグ・タイプスクリプト』の「哲学」という章が挙げられる。ただし、『探究』と「哲学」の連続性に関しては、慎重に議論する必要がある。基本的に、『探究』が、「哲学」から複数のコメントをそのまま表現を変えずに採用しているという意味で、両者に連続性は認められる。しかし、ウィトゲンシュタインの思索の推移に着目する議論では、『探究』と「哲学」の差異に注意することがある (e.g. ダイヤモンド (2004), ハッカー (2004))。

² K. モリス (2007) が指摘するように、いわゆる標準的解釈と呼ばれるハッカーや初期のベイカーらは、ウィトゲンシュタインを、デイヴィドソンやダメットに先駆けた言語哲学者の一人として評価しようとしていた。

だが、この共通見解は、ウィトゲンシュタインがいかにか **how** 治療したかという課題に回答するものであっても、なぜ **why** 治療がそのような方法でなされるのかという理由を与えらるものにはなっていない。

治療方法の理由を明らかにすることは、ウィトゲンシュタインの考えをより深く理解することに貢献すると考えられる。本稿では、このことに貢献することを目指す。そのために、なぜ哲学的治療がそのような方法で、すなわち個々の言葉の用いられ方に着目することによってなされるのか？ という問いに回答したいと思う。

以下の章では、次のように考察を行う。二章では、ダイヤモンドの「小間切れ作戦」を取り上げ、それが、治療対象者の注意を、言葉の用いられ方に向けさせるものであることを検討する。その上で三章では、なぜ **why** 治療がそのような方法で行われるかについて、治療者と治療対象者のあいだの歩み寄りの関係に着目して検討する。最後に四章では、ダイヤモンドの議論が『探究』の治療方法の説明として妥当であることを示すために、両者の構造が同型であることを確認する。

2. ダイヤモンドの「小間切れ作戦」

ダイヤモンドは、ウィトゲンシュタインの治療方法として、「小間切れ作戦 **Piecemeal Method**」と名付けたものを提示した。この方法は、大きな問題に見えたものが実は解消可能な個別の言葉の問題に過ぎなかったということ、治療対象者に気づかせるものである。この方法のポイントは、正しい言語使用の基準を与えることによって相手の言語使用を排除することにあるのではなく、治療対象者自身に考えさせるようなヒントを与えることによって治療対象者を自得に導くことにある。³

ダイヤモンドによれば、治療対象者は、「重要な哲学的諸問題のうちのひとつ **one of philosophy's Big Questions**」とそれに対する「様々の重要な諸回答 **various Big Answers**」が存在すると感じている (p. 213)。だがそのように感じられるのは、「言葉の用いられ方のディテール **the details of the use of words**」 (p. 213) に注意が向けられていないからである。もし何らかのヒントによって、治療対象者の注意を言葉の用いられ方に向けさせることができれば、治療対象者は、「その問題 **the problem** を個々の問題 **a particular problem** に再構成」し、「満足のいく問題の解消に辿り着く」 (p. 213) ことが可能となる。

小間切れ作戦は、正しい基準を与えることによってではなく、治療対象者自身に考えさせるようなヒントを与えることによって遂行されるものであるため、その過程はあらかじめ明らかではないという難点をもつ。というのも、ヒントを通じて何を理解するかは、治療対象者個人の思考に依存するからである。しかし、治療対象者が経験しうる思考過程を、われわれが、ある程度合理的な仕方で再構成することは可能である。

³ この点に賛成するであろうと思われる論者の一人は、E. アンスコムである。彼女は『インテンション』(1957)において、ウィトゲンシュタインの「治療」が、「[言語からの排除]は律法行為によってではなく、説得によって遂行される」(p. 27) と述べている。

ダイヤモンドが再構成した治療は、G. E. アンスコムがウィトゲンシュタインから受けたものである。まずはアンスコム自身の記述を参照しよう。

私は常に現象主義を毛嫌いしており、それによってとらわれていると感じていた。私は、その見方から逃れることができなかつたが、だからといってそれを信じることもなかつた。現象主義の諸困難——例えばラッセルがみつけたものを指摘することは、功を奏さなかつた。その威力、中心にある緊張は、生き残り非常に激しくなつた。その緊張が引き出されるのを、すなわち、その中心にある考え「私はこれ *this* をもっている、そして私は「黄」を（言うなれば）これ *this* と定義する」⁴が効果的に攻撃されるのを私が見たのは、1944年に行われたウィトゲンシュタインのクラスにおいてのみだつた。——このクラスのポイントの一つは、ウィトゲンシュタインが案内標識の解釈について議論していたことにある。私は突如として、それによって行動する方法が、最終的な判断であることを悟つたのである。もう一つのポイントは、私が次のように打ち明けたことにある。「しかし私はまだこういう風に言いたいのだ。青はそこだ *Blue is there*、と」。年上の連中は、苦笑するかあざ笑うかだつたが、ウィトゲンシュタインは彼らを制止し、私の発言をまじめに受けとって、「君が必要としている治療薬を考えてさせてくれ…。もしわれわれが「痛みがかつた *painy*」という、何か表面の性質を表す語をもっていたらどうか想像してごらん」と言った。「治療薬」は効果的で、この物語は、ウィトゲンシュタインが彼に差し出された反論の中から中心的な考えを読み取る能力をもつことを、例証しているのである。実際、ある人は、これ *this* という語は、痛みに対し二次性質をロック流に誤って同化したものだとか抗議するかもしれない。すなわち、あなたは、「痛み」の機能を二次性質を表す語として描き出すことができても、作用 *operation* を逆転させることはできないのだと。だが[ウィトゲンシュタインの]「治療薬」は、「痛み」の機能を二次性質を表す語として描き出すことができることを含意していなかつた。もし「痛みがかつた」が二次性質の可能な語だとしたら、まさしく同じ動機が私を「痛みがかつたのはそこだ」と言わせるよう駆り立てるのではないか？ 私を「青はそこだ」と言わせるよう駆り立てたもののように。私は、「青」は私のもっているこの感覚の名前だ」ということを意味したのでもなければ、あの考え[「青」を二次性質を表す語とみなす考え]に切り替わつたわけでもないのである。(Anscombe, 1981, pp. viii-ix、□内は筆者補足)

ここで、アンスコムにどのような変化が生じたかはただちに明らかではない。われわれは、アンスコムが簡潔に「治療薬」は効果的だつた」とだけ述べている点について、彼女が何を考えたのかをより知ろうとするだろう。実際、ダイヤモンドは、この治療を分析し、彼女の思考の軌跡を明らかにしようとした(2004, pp. 211-2)。われわれも、ダイヤモンドの

⁴ 原文は、“I have got *this*, and I define ‘yellow’ (say) as *this*” である。

分析を頼りに、アンスコムが何を理解したのか推測し、以下のように、ある程度合理的に再構成することができるだろう。⁵

かつてのアンスコムにとっての重要な哲学的問題とは、「青は本当はどこにあるのだろうか？」であり、その回答とは、「青はそこにある **Blue is (out) there**」というものだった。この問題と回答を抱く背景には、彼女が、現象主義的な見方から逃れようとしたという経緯がある。アンスコムは、世界は意識内に現われるものによって構成されるという現象主義的な見方を嫌っており、その問題点を知っていたにも関わらず、現象主義的な見方に陥ってしまっていた。その見方とは、「青」や「黄」といった特定の色合いを、意識内にあるものとして、すなわちアンスコムによってのみ「これ **this**」と呼びうるようなものとみなす、という見方であった。

この現象主義的な見方から脱するため、アンスコムは、「青はそこにある」と回答する必要性にかられていた。というのもアンスコムは、青が本当はどこにあるのか、青は世界の構成要素であるといえるのかに回答することができれば、意識内に現われるものとしての色という現象主義的な見方を脱することができると考えたからである。だがこの回答によってアンスコムができることは、意識内に現われるものとしての色が、どういうわけか世界内にあって空間的位置をもつ、という中途半端なことを表現することに過ぎなかった。

では、なぜアンスコムは、「青はそこにある」と言いたくなくなったのだろうか。アンスコム自身の記述を確認しておくと、ウィトゲンシュタインは、アンスコムに対し、何か表面の性質を表す「痛みがあった **painy**」という想像上の語が仮にあったらどうなるかと問い、このヒントによってアンスコムは、もはや「青はそこにある」と発言したくなくなったと言われている。

再びダイヤモンドの分析の範囲内で再構成するならば、アンスコムが「青はそこにある」と言いたくなくなった理由は、ウィトゲンシュタインの発言が、アンスコムの注意の方向を変えたからである。アンスコムはこれまで、青がどこにあるのか、青は世界の構成要素なのかということばかりに注意を向けていた。これに対しウィトゲンシュタインの発言は、アンスコムの注意を、アンスコム自身の言葉使いに向けさせたのである。

アンスコム自身の言葉使いに注意を向けることは、「痛みがあった」という語を分析することである。ダイヤモンドの記述を補うつもりで分析するならば、まず「痛みがあった」という語は、「痛み」という語を、表面の性質を示す語のように想定するものである。この特徴は、アンスコムが知らず知らずのうちに「青」という語に対して行っていた想定に合致する。すなわちアンスコムが、現象主義的な見方から脱出しようとして「青はそこにある」と発言するとき、「青」という語は、まず内的感覚を表す「痛み」のような語とみなされた

⁵ 以下で与えた再構成は、基本的にダイヤモンドの分析に依拠しており、彼女の記述から導出することが難しいような要素は、混入させないようにした。ただし、議論を明快にするため、ダイヤモンドの記述から意図的に差し引いたものがある。ダイヤモンドは「痛みがあった」という語について説明する際、「二次性質」という言葉を用いているが、本稿で問題になっている事柄を論じるために、特に二次性質に言及する必要はないため、この言葉を用いず再構成を行った。

うえで、物体の表面の性質を表す語でもありうるかのように、想定されていたのである。

アンスコムは、自身の「青」という語の想定が、「痛みがあった」という語の想定と合致することを自覚しただけではなく、「痛みがあった」という語が、われわれの言語使用の中に位置づけることがほとんどできない語である⁶ということをも理解したと考えられる。というのも、これを通してアンスコムは、自身の言葉使いが誤っていたことを自覚することができるからである。

このように、自身の言葉使いに注意を向けることによりアンスコムは、自身が重要な哲学的問題（「青は本当はどこにあるのだろうか？」）を感じていた状態を客観視することができた。そしてこの状態が、実は、「青」という語の文法を一顧だにしないことによって重要だと感じられた問題に過ぎなかったことに、気づいたのである。

以上の再構成は、主に、アンスコムの記述に不足している部分の補足であった。すなわち、治療対象者アンスコムが何にとらわれていたかについての背景の補足と、治療薬「痛みがあった」が与えられることによって、アンスコムの注意の方向がいかに変化したかについての補足である。こうした補足は、われわれがアンスコムにどのような変化が生じたかを知るために役立つものであると考えられる。

以上を踏まえるならば、小間切れ作戦は、治療対象者の思考過程に、直ちに明らかではない部分があるかもしれないが、われわれはそれをある程度合理的な仕方ですべて再構成することが可能なものであるといえる。

3. 歩み寄りとしての小間切れ作戦

ダイヤモンドの小間切れ作戦は、治療者が、治療対象者にヒントを与えることによって、言葉の用いられ方に注意を向けさせることによって遂行されていた。これに対し、われわれが問うことができるのは、なぜ、小間切れ作戦が、言葉の用いられ方に注意を向けさせ

⁶ このことを確認するために、「痛みがあった」という語を、皮膚の表面に現われる何らかの徴候を表す語であり、痛みの感覚が生じた位置を同定することに役立つような語と想像してみよう。ある人が、誰かの背中を見て、「君の背中では痛みが掛かっているぞ」と言うとする。こう言われた人は、体の表面のどこに変化が現われたかを指摘されることによって、自分の痛みの感覚が生じた位置を同定することができるのかもしれない。その人は、その指摘に対して、「やっぱり背中が痛みが掛かっていたか。僕がチクチクと感じていたのは確かに背中だった」と反応するかもしれない。だが痛みの感覚が生じた位置を同定するために、常に目視を行う必要があるとは考えられない。例えばある人が、右腕にチクチクとした感覚を覚えた場合は、必ず腕まくりをして皮膚の表面を確認すべきなのだろうか。もちろん、医者に指示されて、腕まくりをして見せるということは自然であるが、一人で部屋にいる時に、同じことをやる眼目があるとは考えにくい。というのも、そもそもその人が確認すべき位置が腕まくりをすることによって明らかになるということがわかっている時点で、目視による同定の必要性が失われているからである。

ることによってなされるのかという問いである。

これに対し現時点で可能な回答は、哲学的問題が存在していると感じられる状態と、言葉の用いられ方を無視している状態が表裏一体であるため、小間切れ作戦は、治療対象者の注意の方向を、言葉の用いられ方へと向けさせなければならないのである、というものである。この回答は、ダイヤモンドの提示する小間切れ作戦が『探究』の方法であることを認める場合、本稿全体の問いに対する回答の基本的な形を与えるものである。しかしまだ明確でないことがある。この回答は、治療が言葉の用いられ方を問題にする理由にはなっても、治療方法が言葉の用いられ方に注意を向けさせる理由としては、まだ不十分だと考えられる。

例えば次のような疑問が考えられる。すなわち治療方法として、治療者が直接的に言葉使いを批判するのではいけない理由は何だろうか。ウィトゲンシュタインが、アンスコムに対し、「あなたは「青」という語の用いられ方を誤解している。この語は、内的感覚を示すものではない」と批判するのではいけない理由は何だろうか？

治療者が治療対象者の言葉使いを直接的に批判するのではいけない理由は、この方法では、ダイヤモンドが言う「満足のいく問題の解消に辿り着く」(p. 213) ことが難しいと考えられるからである。というのもこの方法では、治療者と治療対象者は全く異なる境地にいることになり、治療対象者は、全く異なる境地から批判されることによって、不満足を覚えると考えられるからである。

治療対象者にとって満足のいく問題の解消がなされるためには、治療者と治療対象者の境地が全く異なっているはず、むしろそれが共有されていなければならない。そしてこのことこそ、ダイヤモンドの小間切れ作戦が、治療者が直接的に言葉使いを批判することによってではなく、治療対象者に対し言葉の用いられ方に注意を向けさせることによってなされなければならない理由である。

ダイヤモンドは明示的にしていないが、治療対象者を言葉の用いられ方へと注意を向けさせるためには、治療者と治療対象者のあいだで歩み寄りが必要だ、ということはきわめて重要である。治療者の境地から見れば、治療対象者が哲学的問題とその回答が存在すると感じる状態は、言葉の用いられ方を無視することによってそのように感じられている状態に見える。だが、ただ単に言葉使いを批判するだけでは、治療対象者がただちに治療者と同じ境地からものが見えるようになるとは限らない。それゆえ治療者は、治療対象者の見方立ってその考えを理解しつつも、治療対象者とは異なる境地からものを見ることができると示唆する。これにより治療対象者は、自身の見方から、自然に治療者の境地へと移行することができるのである。⁷

ダイヤモンド自身は、このことについて、大きな問題を個別の問題に「再構成する re-conception」(p. 213) と述べているが、この表現ではやや説明不足である。というのもこの表現では、見方の変化が必要であることが見落とされてしまいかねないからである。小

⁷ 『探究』第二部のアスペクトにまつわる考察に着目して、哲学的治療を考察する研究としては、J. ジェノヴァ (1995) がある。

間切れ作戦においては、それぞれが異なった境地にいる治療者と治療対象者のあいだで歩み寄りがあるのはじめて、治療対象者のものの見方が変わる。問題の捉え直しはその結果として生じるのであって、こうした見方の変化を経由することなしに直接的に問題を捉え直すことができるという考えは、ダイヤモンドの考えに合致しない。

以上の検討によりわれわれは、ダイヤモンドの小間切れ作戦が、直接的に言葉使いを批判するのではなく、言葉の用いられ方に注意を向けさせることである理由について、次のように言うことができる。治療対象者にとって満足いく問題の解消のためには、治療対象者の見方が、哲学的問題とその回答が存在するという見方から、言葉の用いられ方を問題にする境地へと、自然に変化するのだからなければならないからである。

4. 『探究』における一つのモデルケース

最後にわれわれは、ダイヤモンドの小間切れ作戦において認められること、すなわち治療が言葉の用いられ方に注意を向けさせるものである理由が、『探究』においても認められるかどうかを確認する。そのために、アンスコムの事例と『探究』の治療の特徴がある程度一致するかどうかを、確認する。

本章で取り上げる『探究』の治療は、『探究』の冒頭から始まる、ウィトゲンシュタインのかつての著作『論理哲学論考』（以後『論考』と呼ぶ）に対する治療である。『論考』の著者にとっての哲学的問題は、少なくともその一つは、「名の意味とは何か？」ということに関してであった。この問題に対する回答と考えられるのは、「それは対象である」というものである（cf. TLP §3.203）。『論考』の著者に対しウィトゲンシュタインが行った治療は、大きく三つの段階に区別することができる。すなわち、ウィトゲンシュタインが治療対象者を理解する段階、治療対象者の概念を具体化する段階、そして治療対象者に対し言葉使いに関する反省を促す段階である。

アンスコムの事例を振り返るならば、ウィトゲンシュタインが治療者として行ったことは次のことであった。すなわち、哲学的問題とその回答が存在すると感じる状態の理解と、治療対象者の言葉使いを反映した代替物（「痛みがあった」）の提示である。

アンスコムの事例と比較すると、『探究』には、最後の段階が、すなわちウィトゲンシュタインが治療対象者に対し言葉使いに関する反省を促す段階が含まれていることがわかる。この違いは、アンスコムの事例が実践的なものであったことに対し、『探究』の治療が記述的なものである点から発生したものと考えられる。両者の違いが、治療方法を考察するうえで重要な差異をもたらさないかどうかには注意しつつ、『探究』の治療の三つの段階を確認していこう。

第一の段階は、ウィトゲンシュタインが治療対象者の見方を理解する段階である。ここでウィトゲンシュタインは、治療対象者が考えていることを理解する過程を記述している。アンスコムの事例で言えば、われわれがダイヤモンドをもとに再構成を試みた部分にあたる。この段階でウィトゲンシュタインは、アウグスティヌスを引用し、哲学者にとってはある程度なじみのありそうな言語観を紹介している。

アウグスティヌス『告白』第一巻、第八章。「大人が、ある対象を名前で呼んで、そちらのほうに向いたとき、私にわかったのはその対象が、呼びかけられた音によってあらわされたということだ。大人がその対象を指示しようと思っていたのだから。そんなふうに私が理解したのは、身ぶり、つまりあらゆる民族の自然な言葉、のおかげである。なにかを望んだり、捕まえたり、拒んだり、避けたりするとき、その心の動きを、表情や目の動き、手足の動きや声の響きによってしめす言葉が、身ぶりなのだ。こうして私は、いくつかの言葉が、いろんな文章の、特定の箇所でも何度も繰り返し使われているのを耳にして、どういう対象の記号になっているのか、しだいに理解するようになった。そして私の口がその記号になじんでからは、記号を使って、私の望みを表現するようになったのである」(PU §1)

アウグスティヌスは、自身の言語習得の場面を回顧的に再構築している。すなわち自分が言語を学ぶことができたのは、大人の身ぶりによる直示的な言語使用を見ることによってであるという。アウグスティヌスに従えば、例えば子どもは、大人がある猫を指差して「タマ」と発音するのを見聞きし、これにより、ある猫が「タマ」という音列によって表されることを理解することになる。

ウィトゲンシュタインがアウグスティヌスの言語観を取り上げた理由は、それが、治療対象者である『論考』の著者が前提としている、思索の背景であったからである。

このアウグスティヌスの発言には、人間の言語の本質について特定のイメージ [像] が描かれているように思える。つまり、単語は対象の名前であり、——文は、名前をつないだものです、というイメージである。——こういう言語イメージが生まれるのは、つぎのような考え方があるからだ。どの単語にも意味がある。その意味は単語に配属されている。その意味は対象であり、その代理人が単語なのだ。(PU §1)

『論考』の著者は、言語の本質についてあるイメージを抱いていた。そのイメージを構成するのは、「意味」「対象」という概念である。これらの概念は、意味についての哲学的な想定を示している。すなわち、どの単語にも逐語的に意味があり、その意味とは対象であり、単語は対象の代理をするという想定である。こうした想定の中では、これらの概念も、その語が日常的に使われる時とは異なったしかたで想定されている。例えば「対象」という語は、ある言葉を用いて人が何を指差すかということと、ある言葉が何を意味するかという、異なった二つの事柄を重ね合わせるものとして想定されている。

このように治療の第一段階でウィトゲンシュタインは、治療対象者が考えていることを記述してみせた。第二の段階は、治療対象者の概念を具体化する段階である。ここでウィトゲンシュタインは、プリミティブな言語ゲームを提示している。アンスコムの事例で言えば、ウィトゲンシュタインが治療薬として「痛みがあった」を与えたことが同じ段階にあたる。ただし若干の差異があると思われるのは、アンスコムに対する治療薬が単語のレ

ベルであったのに対し、プリミティブな言語ゲームは、言葉を理解する一連の状況をも含むということである。それゆえ『探究』の治療では、ただ単に治療薬を提示しているだけではなく、もし哲学的な想定「意味」「対象」といった概念が成立するとすれば、それはどんな場合であるか具体的に想像してみせてもいると言える。

この段階でウィトゲンシュタインは、「意味」「対象」という概念に焦点をあてる。これらの概念は、知らず知らずのうちに言語をきわめてプリミティブなしかたで想像しているとき、成立するかのように思われるものである。

意味という、あの哲学の概念が生まれるのは、言語がどのように働くのかを、プリミティブに想像しているからだ。いや、「私たちの言語よりプリミティブな言語を想像しているからです」とも言えるだろう。(PU §2)

「意味」という概念、すなわちどの単語にも逐語的に配属されており、それは「対象」であり、単語によって代理されているという概念は、日常的な意味という語の用法からかけ離れたものである。われわれがふだん、「意味」（あるいは「対象」）の語を用いてコミュニケーションをする時、こうした想定はまったく問題になっていない。だが、仮にこの概念が成立するようにみえたとすれば、それは非常にプリミティブな言語においてであると考えられる。

プリミティブな言語としてウィトゲンシュタインが提示しているものは、以下の、大工と助手によるやりとりである。

アウグスティヌスが説明したような言語を、想像してみよう。それは、大工Aと助手Bのコミュニケーションに役立つような言語である。Aが石材で建物を建てる。石材は、ブロック、ピラー、プレート、ビームだ。Bが石材を手渡すことになっている。それも、Aが必要とする順番で手渡さなければならない。この目的のために、ふたりは、「ブロック」、「ピラー」、「プレート」、「ビーム」という単語でできた言語を使う。Aがある単語を叫べば、——それを聞いたBは、その単語に対応する石材をもって来るように学習している。——これを、完全なプリミティブ言語だと考えてもらいたい。(PU §2)

このやりとりにおいて、「対象」にあたるものは現物の石材、「単語」にあたるものは「ブロック」、「ピラー」、「プレート」、「ビーム」⁸である。確かにここでは、「意味」という概念が成立しているかのようにみえる。すなわち、どの単語（「ブロック」）にも逐語的に対象（石材としてのブロック）があてがわれている。

ここでは「対象」という概念における想定も、ある見方において成立しているかのように見える。「対象」という概念の想定とは、すなわちある言葉を用いて人が何を指差すかと

⁸ これらは一語文であるので、ここでは「文」が何にあたるのかは問題にしない。

ということと、ある言葉が何を意味するかということの同一視であった。これが成立するように見えるのは、命令することと指差すことが、意味という抽象的な次元において同一視されること⁹によってである。すなわち、Aが「ブロック」という言葉で命令することと、Aが「ブロック」という言葉で指差すものが、Aが「ブロック」という言葉で意味することにおいて、同一であると考えることによってである。

これらの同一視が、つまり「対象」概念が成立するように見えるのは、プリミティブな言語において、Bの反応が非常に限られているからである。つまりここでは、Bの反応については、石材をもってくるか否かということしか問題にしていないからである。例えばAが黙ってある石材を指差すとすれば、Bの反応はどうだろうか。ここでは、石材をもってくるか否かしか問題になっていないため、BはAが指差した先にある石材をもってくるだろうと考えられる。それゆえここでは、命令することと指差すことを同一視することに問題はないように見えるのである。

このように『探究』のウィトゲンシュタインは、第一と第二の段階において、治療対象者を理解し、その概念を具体化する過程を記述してみせた¹⁰。第三の段階は、治療対象者に対し、言葉使いに関する反省を促す段階である。この段階でウィトゲンシュタインは、プリミティブな言語ゲームを検討することにより、『論考』の著者に対し、彼が知らず知らずのうちに無視してしまっていた既知の事柄を、思い出させようとしている。

ウィトゲンシュタインは、プリミティブな言語がきわめて限定的なものであることを指摘する。

アウグスティヌスは、いわばコミュニケーションのシステムを説明しているのかもしれない

⁹ 今後の研究課題として、「命令することと指差すことの同一視」が、哲学的病を解明する一つの着眼点になりうることを、ここで示唆しておく。命令すること、指差すこと、あるいは意図すること、期待すること等々は、哲学的な意味作用というイメージの形成と密接であると考えられる。すなわち、目に見えないやり方で、人間が何事かを意味するというイメージの形成のために、これらのことが関係していると考えられる。こうしたアイディアは、『探究』に潜在的であると筆者は考えているが、現在はまだそれをテキストによって裏付ける作業の途中である。

¹⁰ ここで示した第一から第二の段階は主に治療対象者（哲学者）のことを理解し検討する段階である。この段階について筆者が示したことは、T. モラウエッツ（1978）がウィトゲンシュタイン哲学の本性について主張したことと一致する。モラウエッツによれば、ウィトゲンシュタインの哲学は、「実践の本性の考察」（p. 147）を行うことである。実践の本性の考察とは、「語り・考え・行為する日常的な状況から一步引いて、そのような状況を記述し、考察するような独自の」営みであり、「自分たちが何をしているかを、われわれが「実践」と呼んだ種類の事柄を記述することによって、理解したり、説明したりする」反省的な考察である（p. 140）。ここでモラウエッツが、「実践」ということで意味しているのは、日常的な行為だけではない。彼によれば、「哲学者の主張」も「一種の実践」（p. 140）である。それゆえ、ウィトゲンシュタインの哲学は、哲学者の言語の営みの本性を考察することであると言える。こうしたモラウエッツの主張に、筆者も基本的に賛成である。

れない。ただし、私たちが言語と呼ぶものすべてが、このシステムであるわけではない。この点を確認しておく必要のある場合が存在する。つまり、「これは言語を描写したものとして使えますか？ それとも使えませんか？」という質問が出てくるからだ。その答えとしては、「使えるよ。けど、ごく狭く限られた領域でだけ。君が描写しようなどと思っている全体に対しては、ムリだね。」…… (PU §3)

ウィトゲンシュタインの指摘を受けて考えてみるならば、確かに、プリミティブな言語は、きわめて限られたものであるといえる。例えば、品詞も人数も状況も非常に限られている。このことからわれわれが思い出すことができるのは、われわれが一般に言語について理解している多くの事柄が、プリミティブな言語においてどのような仕方でも問題になるのかが不明確である。例えば、発言の正誤がどのような仕方でも問題になるのか、そもそも発言の正誤ということが意味をなすのかわからない。このやりとりを三人以上でやるときはどのようになるのか、そもそも三人以上でできるやりとりなのかかわからない。大工だけではなく助手も発言するとすればどうなるのか、あるいは助手が発言するというのをこのやりとりで問題にすることができるのかわからない。どちらかが嘘をついたらどうなるのか、嘘をつくということが意味をなすような状況と言えるのかわからない。

プリミティブな言語が、われわれが一般に言語について理解している多くの事柄と、どのような関係にあるのかは、きわめて不明確である。しかも、それを関係付けようとする試みも、早い段階で頓挫してしまう。例えばわれわれは、プリミティブな言語に品詞を加えたり、人数を増やしたり、状況を複雑にしたりして、少しでもこの言語と、既知の事柄との関係を明確にしようとするかもしれない。だが、この試みは、他ならぬ「意味」や「対象」という概念によって阻まれる。というのも、プリミティブな言語が複雑になればなるほど、これらの概念は成立しなくなってしまうからである。最初の障害は、逐語的な語と対象（あるいは意味）の一対一対応という想定¹¹である。この想定は、固有名詞以外の品詞にはうまく対応しない。このように、もし「意味」「対象」という概念を守ろうとするなら、プリミティブな言語と、われわれが一般に言語について理解している多くの、既知の事柄との関係を、明らかにすることはほとんどできないのである。

このように、『探究』のウィトゲンシュタインは、『論考』の著者に対し、彼が知らず知らずのうちに無視してしまっていた既知の事柄を、思い出させる。これが第三の段階であり、治療対象者に対し、言葉使いに関する反省を促す段階であった。

『探究』の治療が三つの段階によって説明されるとすれば、以下の三つの差異に注意しつつも、『探究』の治療とアンスコム的事例との同形成を認めてよいと考えられる。一つめ

¹¹ この想定は、「対象」という概念にとって、きわめて重要である。確認したように、「対象」という概念においては、二つの事柄——ある言葉を用いて人が何を指差すかということと、ある言葉が何を意味するかということが同一視されていた。この同一視のもとに「対象」を把握しようとするのは、逐語的な語と対象の一対一対応が成立するか否かに依存している。よって、「意味」という概念にとって重要な「対象」概念を守るためには、この想定を崩すことはできないのである。

の差異は、初めに確認したように、アンスコム的事例において、第三の言葉使用に関する反省の段階があまり明白ではない点にある。しかし、この差異は、われわれが合理的に再構築することによって補完可能なものであると考えられる。

二つめの差異は、アンスコムに与えられた「痛みがあった」という治療薬が単語のレベルであったのに対し、プリミティブな言語は、語を理解する状況を含んでいるということである。アンスコムは「痛みがあった」という語が成立する状況を自身で考えてみなければならなかったが、『探究』ではすでに与えられている。この差異は、一つめの差異に対しても言えることであるが、治療の実践よりも、治療のモデルケースを記述した『探究』の方が、より丁寧であり記述も豊かであるということから生じてきていると考えられる。

最後に、これまでの二つとは別の意味で生じる差異が挙げられる。すなわち、アンスコム的事例においては治療されるものが人であったが、『探究』では、治療対象と治療対象者の区別がほとんどされていなかったように見える、という差異である。この差異は、治療の実践が常に現実的な人を対象としている一方、『探究』がより一般性の高い治療のモデルケースを記述していることから生じていると考えられる。

以上の三つの差異は、治療実践と治療のモデルとの違いから生じてきたものであった。だが、われわれがアンスコム的事例を再構成することによって、差異を補える限り、ダイヤモンドの小間切れ作戦と、『探究』の治療とは、同じ構造を当てはめて考えることができるものとみなせる。

5. 結語

アンスコム的事例は、基本的な構造においては、『探究』の治療と同じであり、治療者が治療対象者を理解し、その概念を具体化し、そして言葉使用に関する反省を促すことによって行われる。このことから、ダイヤモンドの小間切れ作戦は、『探究』の治療方法の説明として基本的に妥当であると認められ、同時に、小間切れ作戦がなぜ言葉の用いられ方に注意を向けさせるものであるかの理由も、『探究』の治療方法の理由として認められると考えられる。

すなわち『探究』の治療が、言葉の用いられ方に注意を向けさせることである理由は、哲学的問題が存在していると感じられる状態と、言葉の用いられ方を無視している状態が表裏一体であるからである。そのため、治療方法は、治療対象者の注意の方向を、言葉の用いられ方へと向けさせなければならないのである。

しかも治療が、直接的に言葉使用を批判するのではなく、言葉の用いられ方に注意を向けさせることである理由は、満足いく問題の解消のためには、治療対象者の見方が、哲学的問題が存在するという見方から、言葉の用いられ方を問題にする境地へと、自然に変化するのではなければならないからである。これは治療者と治療対象者の歩み寄りによって成立する。

本稿の一連の考察は、哲学的治療の方法についての一般的な理解を深めることに貢献すると考えられる。治療が個々の言葉の用いられ方を検討することはある程度認識されてき

たものの、それが歩み寄りによってなされるということは、あまり強調されてこなかった。治療対象者からすれば、治療には見方の変化がともない、治療者からすれば、治療には相手の見方を理解し、その言葉使いを具体化する作業がともなう。このことが広く認識されることにより、治療についての一般的な理解は深まると考えられる。

今後の課題としては、少なくとも、治療の内実を明らかにするための課題が一つと、治療としてのウィトゲンシュタイン哲学が他の哲学とどのような関係にあるかを明らかにするための課題が一つ存在する。治療の内実を明らかにするための課題とは、治療にとって、言葉の用いられ方の検討に還元できない面が重要かどうかという課題¹²である。言葉の用いられ方の検討に還元できない面とは、倫理的な面のことである (cf. J. バックストローム, 2011)。もし倫理的な面が重要であるとすれば、その理由は、治療の成功が、治療を受ける人の意志にある程度依存しているからである。

もう一つの、治療としてのウィトゲンシュタイン哲学が他の哲学とどのような関係にあるかを明らかにするための課題とは、広い意味での言語哲学と哲学的治療の関係を検討することである。この検討により、哲学的治療が、言語哲学から明確に区別されるものであり、なおかつ、哲学的な意義をもつものであることを示したい。

ウィトゲンシュタインの遺稿・講義録と略語一覧

PU: *Philosophical Investigations (PI)*. 4th edition. Hacker, P.M.S. & Schulte, J. (eds. and trans.). Oxford: Wiley-Blackwell. 2009. (丘沢静也訳、(2013)『哲学探究』、岩波書店。)

¹² 治療にとって、言葉の用いられ方の検討に還元できない面が重要かどうかを検討するにあたって、次のような対比が参考になる。研究者の中には、治療の目的とウィトゲンシュタインが言語について考えたこととの関係を密接なものとする者と、このことをそれほど重視しない者がいる。前者にあたるのは G. ベイカー (1991) であり、彼は治療の目的が、われわれの言語について「展望のきいた記述を与えること」(p. 22) だと主張している。ベイカーに従えば、ウィトゲンシュタインが言語について考えたことと、哲学的治療を切り離して考えることはできないことになる。一方、J. ピーターマン (1992) は、哲学的治療の倫理的な面を重視し、治療をウィトゲンシュタイン個人の問題を解消するためのものとみなす (p. 13)。ピーターマンに従えば、治療の目的は、ウィトゲンシュタインが言語についての考えたことを明確にすることなく、理解できるものとなるかもしれない。

だがこの対比は表面的なものであり、両者は互いに矛盾しない。確かに、哲学的治療の歴史的成立には、ウィトゲンシュタイン自身による克己という面が深く関係していることは認められる。しかし『探究』は、これまでウィトゲンシュタインが言語について思索してきたことの一つの到達点であり、それゆえ治療も、ウィトゲンシュタインが言語について思索してきたことの上に成立していることは疑いが無い。治療とウィトゲンシュタインの人生の関係を検討することは重要な課題であるかもしれないが、このことが重要だとしても、治療がウィトゲンシュタインの個人的な営みに終始するという事にはならない。それゆえ筆者は、両者を統合する仕方、哲学的治療の倫理的な面について論じていくつもりである。

RPP II : *Bemerkungen über die Philosophie der Psychologie: Letzte Schriften über die Philosophie der Psychologie*. Suhrkamp. 1989. (野家啓一訳、(1988) 『心理学の哲学2』、大修館書店。) *The Big Typescript: TS 213, German English Scholars' Edition*. Luckhardt, C.G. & Aue, M.E. (trans.). Oxford: Wiley-Blackwell. 2005.

TLP : *Tractatus Logico-Philosophicus*. Pears, D.F. & McGuinness, B.F. (trans.). London: Routledge & Kegan Paul. 1961. (野矢茂樹訳、(2003) 『論理哲学論考』、岩波書店。)

※引用する際は、主に翻訳を用い、必要に応じて表現を変更した。

参考文献

Anscombe, G. E. M. (1957). *Intention*. Blackwell. (菅豊彦訳、(1984) 『インテンション：実践知の考察』、産業図書。)

———. (1981). *Metaphysics and the philosophy of mind*. Basil Blackwell.

Backstrom, J. (2011). Wittgenstein and the moral dimension of philosophical problems. *The Oxford Handbook of Wittgenstein*. Kuusela, O., & McGinn, M. (eds.). Oxford University Press.

Baker, G. (1991). Philosophical Investigations section 122: Neglected Aspects. *Wittgenstein's Philosophical investigations : text and context*. Arrington, R.L., & Glock, H. -J. (eds.). Routledge.

(引用の頁数は、(2004). *Wittgenstein's method : neglected aspects : essays on Wittgenstein*. edited and introduced by Morris, K. J. Blackwell Pub. に従う。)

Diamond, C. (2004). Criss-cross philosophy. *Wittgenstein at work: method in the Philosophical investigations*. Ammereller, E., & Fischer, E. (eds.). Routledge.

Fischer, E. (2011). *Philosophical delusion and its therapy: Outline of a philosophical revolution*. Routledge.

Genova, J. (1995). *Wittgenstein : a way of seeing*. Routledge.

Hacker, P. M. S. (1972). *Insight and illusion*. Oxford University Press. (米沢克夫訳、(1981) 『洞察と幻想：ヴィトゲンシュタインの哲学観と経験の形而上学』、八千代出版。)

———. (2004). Turning the Examination Around. *Wittgenstein at work: method in the Philosophical investigations*. Ammereller, E., & Fischer, E. (eds.). Routledge.

Morawetz, T. (1978). *Wittgenstein & knowledge : the importance of on certainty*. University of Massachusetts Press. (菅豊彦訳、(1983) 『ウィトゲンシュタインと知：『確実性の問題』の考察』、産業図書。)

Morris, K. L. (2007). Wittgenstein's method: ridding people of philosophical prejudices. *Wittgenstein and his interpreters : essays in memory of Gordon Baker*. Kahane, G., Kanterian, E., & Kuusela, O. (eds.). Blackwell.

Mulhall, S. (2004). Philosophy's hidden essence: PI 89-133. *Wittgenstein at work: method in the Philosophical investigations*. Ammereller, E., & Fischer, E. (eds.). Routledge.

Peterman, J. (1992). *Philosophy as therapy: An interpretation and defense of Wittgenstein's later philosophical project*. SUNY Press.